

佳作

太鼓がくれた感動

青森県 青森市立浦町中学校三年 佐藤 有希

先日、僕は応援委員会を引退しました。

僕が応援委員会に入ったきっかけは、友人に推薦されたことです。

僕は人前で大声を出すのは苦手なタイプだったので、最初の頃は自分にこの仕事ができるのか不安でした。しかし、何度も繰り返し返し練習しているうちに大声も出せるようになり、心の中の不安もいつしか消えていきました。

二年生になったある日、僕は先輩や顧問の先生から、次期太鼓に決定だということが告げられました。太鼓は応援のリズムを刻む欠かせない役なので、そんな大役を自分が引き受けてもいいのか大変悩みました。でもみんな期待してくれていたもので、その期待に頑張っただえようと思えました。

それからは先輩の指導を受け、精一杯練習しました。そうしているうちに腕も上達し、不安も消え、初舞台が楽しみになりました。

二年の夏、ついに僕の初舞台がやってきました。夏季中体連での応援で先輩が手を怪我して、急遽僕が太鼓を叩くことになりました。うまく叩く自信はありません。先輩に褒められていたし、何よりも今まで精一杯練習してきたから大丈夫だと思えました。しかし、現実には甘くありませんでした。初めて大勢の前で叩く緊張に押しつぶされそうになりました。そのせいで頭が真っ白になって、リズムが狂ってしまい、自分の未熟な点を知りました。その上自分のことばかりに専念しすぎ、選手を心から応援できなかつたように思いました。

それからはこの反省をバネにし、さらに練習を積みました。どんな状況においてもリズムが狂わないように、体に染み込ませて叩きました。そして、周りの状況、試合の流れをしっかり把握できるように、太鼓を叩きながら周りの様子を観察する努力もしました。そのおかげで、どんな状況にも動じず、臨機応変に叩けるようになりました。

そして三年の夏、僕たちにとって最後の中体連がやってきました。今まで精一杯練習してきたので、その成果を出し切り、必ずやり遂げようと心に決めました。それと同時に、ただ自分だけの為に叩くのではなく、選手が全力を出せるように、そして応援団が一丸となれるように気配りをしながら叩こうと思えました。

いよいよ応援合戦、入場行進が始まり、僕は精一杯、心を込めて太鼓を叩きました。叩いている最中、全校生徒が一つになっているのを感じ、熱いものが込み上げてきました。叩き終えてふと気がつくとき、手のまめがつぶれ、血がにじんでいました。

最後まで精一杯やり遂げることができた自分自身に、そして応援団のみんなに対して僕はとても感動していました。その上、奨励賞という名誉ある賞をもらうことができ、そのメンバーとして貢献できたことが、一生忘れられない中学生生活の思い出になりました。